



# 火焰の愛

*valencia*

\*これはサンプルです

(本編第三章より)

女性の瀬川をタクシーに乗せて一足先に帰し、水森は八坂と共に一旦会社へ戻った。

階段を上がる水森の後ろから、八坂が手を伸ばしてデニムの臀部を撫で

てくる。

「ちよつと、何するんですか」

慌てて水森は立ち止まり、後に続く八坂を非難する。

「ははは、いい反応だね。あれ、電気点けっぱなしで帰ったのかな、仕方ない子達だ……」

何でもない調子で八坂が隣を通り過ぎ、先にオフィスへ入った。

「俺らが戻ってくるかわかっていたからでしょう……。今日は、八坂さんにまで迷惑をかけてすみませんでした」

鞆をおろし、八坂に向かって水森は頭を垂れる。

「僕にそんなことしないでいいよ。それより、ちゃんと食べてる？　水森君だしぶ痩せたよ。前はもつとお尻もぷりぷりしてたのに」

「ケツで俺の体格計らないでください。年だから筋肉落ちてるだけです」  
「まあ、僕が言うのもなんだけど、少し仕事詰め込み過ぎなんじゃない？  
ロクに寝てなさそうだし、だいぶストレスも溜めてるでしょ」

「本当に、八坂さんが言うことじゃないですね。人も金も足りませんから、  
仕方ないですよ」

「ははは、耳が痛いねえ……求人サイトでも呼びかけてるんだけど、なか  
なかい子捕まらなくてねえ」

「いい加減な奴が来て問題起こされたり、すぐにバツくれるより今の  
方がましですね。犬山でこりごりです」

「今回はやってくれたねえ。うちもコンプラ研修とかした方がいいのかな」  
「そんな時間も予算もないでしょう。実地で叩き込むしかありません。俺達

みんなそうやって来たんだから。でも、犬山は助かってますよ。あいつ、絶対にヘコみませんから。ああいう奴はまず逃げ出さないですしね」

「明るいのはいいよね、雰囲気も良くなるし。その分彼には常識がないけどねえ……」

「確かに、教育してもらってる瀬川には負担かけてます」

「うん……聞いたよ。午前中、瀬川ちゃん、とうとうキレたんだって？　ちよつと厳し過ぎてない？　女の子なんだから加減しないと」

「わかるんですが、でもあいつには早く成長してもらわないと……真面目だし、女なのに根性あるし、気が利くし、……絶対に瀬川は、早いうちに上に立つ奴なんです。確かに一年未満のADに無茶言ってることは自覚してます。でも、今回だってベソかいても結局逃げなかった……だから俺も

瀬川を頼れるんですよ」

「随分と買ってるんだねえ」

「信じてますから。……それに、いつまでも桜田がいるわけじゃない……、  
そうなんでしょう？」

そう言っで見つめてくる水森が、少し辛そうだと八坂は気が付いた。

「油断がならないねえ、まだ会議で名前が挙がっただけなのに、どこから  
聞き出してくるのやら」

相変わらず呑気な口調で話す八坂は、自分の真意を必死で探っているよ  
うに見える水森の表情を面白く感じた。

「そうじゃないですよ。春の新番組に新人ディレクターが起用されるのは、  
うちの恒例ですし、俺だってその一人だった。桜田はもう十分に実力があ

るし、ましてや来年は、八坂さんのホラー企画でしょう？　寧ろ、ここで桜田が使われなきや可笑しい」

「本当に何も決まっていんだよ。新番組をやるかどうかすら決定してないのに……。それにね、どこも人手不足のこのご時世に、ADなんていう奴隷仕事は、募集をかけたって中々来てくれるもんじゃない。今、桜田君に抜けられると、君が困るじゃないの」

「そんな理由で引き留められるわけないでしょう。考えてもみてください、八坂さんは桜田の仕事ぶりを十分に知っているし、それもホラーなら、桜田以外の他に一体誰を……」

「だから今みたいに、瀬川ちゃんに無理をさせていいのかい？」

「瀬川は……そんなつもりじゃ……」

優しい口調で突き付けられた言葉が、水森の心へ深く刺さった。瀬川の成長の為にその手を引っ張っているのか……、そこにほんの少しでも、己の打算はないと言えるのか。八坂の指摘は、そこを問うており、水森は下心がないと言い切れない自分に気が付いた。

もしも桜田を助ける為に、瀬川の尻を叩いていたら、それはあつてはならないことだ。結果として、それが瀬川の為になるとしても。

「龍平君……前の仕事を辞めた時のこと、忘れたわけじゃないでしょ？」

「それは……もちろん覚えてます」

不意に尋ねられ、八坂と視線が絡み合う。気まづくなつて水森は目を伏せた。

「嫌な事を思い出させて悪いけど、誰だって感情と理性のバランスをとつ



て仕事をしてる。心には限界がある。今回のこと、僕はひとつのシグナルだと受け取っている。気を付けた方がいいと思うなあ」

「わかってます」

十年前、水森は自分の上司を殴って仕事を辞めた。当時も今も、相手は下種だという思いに変わりはないし、それなりに割り切って付き合っていたが、最後の最後で理性に感情が勝った。

人間誰しもキレるときはキレるということを、自分が一番よく理解しているつもりだった。

厳しく接している自覚はあった筈なのに、瀬川の従順さに付け込み、逆らわれないのを良いことに、瀬川がどれだけストレスを抱えているのか、少しも推し量ろうとはしなかった。

「それに、新番組のことは本当にまだ未定なんだ。来年はやめて、二年後に予算を十分に使って、映画か何か、大きな企画をやろうって話もあるし、僕はそっちに賛成してる。もちろんホラーでね。その時には当然、桜田君に監督をしてもらうことになるだろうね」

「本当ですか……」

縫るような目で水森に見つめられ、八坂は気恥ずかしくなる。

「もちろん……っていうか、龍平君にそんな顔されたら、嫌って言えないよ、……。だからさ、龍平君も焦らずにさ……」

「わかりました……これからは瀬川にも少し配慮して……や、八坂さん？」

「龍平君」

「あの……離してください」

八坂に手首を引き寄せられ、水森は目の前の男にすっぽりと包み込まれた。長い腕が水森の胴を包み込む。片方の手は手首を掴んだままだ。

「細い手首だね。身体も気のせいじゃなく本当に痩せた。ちよつと仕事のペースを落とすんだよ。桜田君のこととは別に、近いうちにもう一人ADを連れてくるから。予算も何とかするからね、ちゃんと安心して食べて寝なさいよ」

「本当ですか？」

「約束するから、心配なくていいよ。だから龍平君は、この浮き出た肋骨を何とか……痛たたつ」

「お気遣いには感謝しますが、これ以上はセクハラを超えて強制猥褻です」  
シャツの下から侵入してきた手の甲を水森は抓った。

「せつかく良い雰囲気になってきたのに、台無しじゃないか。じゃあせめてキスしてくれるかい？」

「それも強制猥褻です。あと良い雰囲気になんてなってません」

近付いて来た顔を掌で押し返すと、唇を窄めた男の視線が自分の後ろへ注がれていることに遅れて気が付いた。水森は振り返り絶句する。

「やれやれ、せつかく見せつけてやろうと思ったのに、興醒めだな。明日も早いから、年寄りは一さつさと帰るとしよう。じゃあ、戸締り頼んだよ、水森君、それから桜田君も」